



ビワコダス研究短報 No.1

創刊にあたって

ビワコダス：次につながる研究の流れ 板倉安正（滋賀大学・琵琶湖地域環境教育研究会代表）

「ビワコダス」、この言葉は未だ広く定着していないが、琵琶湖とその周辺の風の様子及び風と生活との関わりを「住民参加型研究調査」の手法を適用して調べようというものである。それから得られる成果と共に、これからの研究の在り方としても期待したい。

そもそも私がこれにかかわったのは、嘉田由紀子さんと大西行雄さんが滋賀県琵琶湖研究所在職時から始めたパソコン通信による「ホタルダス」、「ユキダス」（水と文化研究会、1989～1999、『わたしたちのホタル』；琵琶湖地域環境教育研究会、1990、『雪んこの気象日誌』）からである。当時、私は「コンピュータ教育」と称して中学校の教科、技術・家庭科でコンピュータについての教育ができないかと考えていた。そのような中、この教育はコンピュータを中心とするのではなく情報という捉え方で進めるべきだということになり、情報教育という言葉が使われるようになった。ところで、情報教育といっても、ほんとうは何をすればいいのであろうか。これにヒントを与えてくれたのが、「ホタルダス」、「ユキダス」であった。いろいろな人からホタルや雪についての情報を集め、これを見やすく整理して発信し、それに刺激されてさらにまたいろいろな情報が集まってくる。この輪の中に学んでいる子ども達も加わり、彼らの自発的な学びを引き出していく。これは情報教育になると思った。

既にご存知のことと思われるが、1996年5月6日の朝日新聞の社説がこの「ホタルダス」を取り上げて、その発想とまとめ方を評価している。科学と生活と環境との関わりを理解を進めるのにこのような「住民の参加」が大切であるとして、生活環境主義の重要性を認めている。このような流れの中から出てきたのが、「ビワコダス」である。上の二人を中心に西之園晴夫先生を代表として結成された琵琶湖地域環境教育研究会に集まった多くの市民や学校の先生方によって、これは運営され、成果を上げつつある。風をキーワードにして気象学、民俗学など様々な切り口から研究が進み、いろんな絡まりが見え出している。ただ、この成果を評価することは難しいことと思われる。なぜなら、これまでの研究の評価は専門

家と称する人たちの集合の中でのみなされていたからである。住民参加型と言う場合、そこには別の専門家グループや専門家でないいわゆる一般の人を含む。こういう場合の研究の評価はどうあるべきなのだろうか。どうもこれまで専門家は自身の殻に閉じこもり一般の人を遠避けてきたように思う。

既に多くのところで指摘されているように、これほどまでに科学と技術が市民生活と深く関わるようになった今日、専門家だけの科学と技術の時代ではないと思う。村上陽一郎が「こうした社会では、その全ての成員が、科学や技術について、自ら判断し、行動できるだけの基礎、あるいは素地を持たなければならない。」（2000、『科学の「現在」を問う』（講談社現代新書）講談社、p186）と指摘しているように、これからは、「科学と技術の市民化」が求められる。また、加藤尚武が最近の科学技術に関する問題を列挙し、それが哲学にとって未体験のゾーンに直面しているとして、「どの問題をとっても領域にまたがる知のあり方が必要になってくる。」（1997、『進歩の思想・成熟の思想』（講談社学術文庫）講談社、p293, 294）から、既成の枠組みに囚われることのない「必要な領域にまたがる知の確立」が求められると述べている。「ホタルダス」、「ユキダス」から「ビワコダス」に至る研究の流れは、これらの線上にあると思われ、これからの研究の新しい地平を切り開いてくれるものと期待される。

ただ、皆さんとの議論の中でも出ているように、これからについては未だ確固たる展望がない。あるいは、思いもしない誤った方向へ進むかもしれない。展望を深め、進む道を誤らないためには、常に議論と研鑽を積み重ねるしかないと考えている。

なお僭越ながら、小生が西之園先生の後を受けて琵琶湖地域環境教育研究会の代表を務めさせて頂くことになりました。西之園先生のような指導力はありませんが、会員の皆さんの積極性と協調性を基盤にこの活動のますますの発展のために努力いたしますので、よろしくお願ひします。

2001年1月10日

◆目次

ビワコダス：次につながる研究の流れ	板倉安正（滋賀大学）	1
アフリカ・マラウイ湖の風と人びとの暮らし	嘉田由紀子（琵琶湖博物館・京都精華大学）	2
琵琶湖の風伝承 ーウミンドの語る風下伝承ー	青柳智之（日本民俗学会会員）	4

アフリカ・マラウイ湖の風と人びとの暮らし

嘉田由紀子（琵琶湖博物館・京都精華大学）

<生活と科学をつなぐ>

人は自分の周囲の環境をどのように認識してきたのか？ 特に雨や風、気候現象をどのように認識してきたのか？ ビワコダスの出発点の疑問のひとつは、このようなたいへん一般的な環境認識の問題である。人の環境の認識を研究するには、大きくわけてふたつの方向がある。ひとつは現象を計測しながら、因果関係を明らかにし、概念を厳密にしていく「科学的概念化」の方向であり、もうひとつは現象を人間の精神や意識のあり方からとらえていく「意識的文化化」の方向である。前者は「自然科学」、後者は「人文科学」といわれてきたが、このような違いはむしろ後からできてきたもので、ここではそのことを問わない。ただ、ビワコダスでは、この両方のアプローチをつなげることで、個別の「科」の学問に分断されてきた環境認識の「総体」に迫ろうという意図がある。

さて、そんな「大言壮語」をはきながら、では、それは具体的にどう「学問」できるのか、という問題がこれまでの研究会のひとつの課題でもあった。「生活と科学をつなぐ」というビワコダスの基本方向はこの研究の「通奏低音」となっている。そのためのひとつのステップとして、ここに琵琶湖とは大きく異なる生態、社会文化状況下での、「風のエピソード」を紹介したい。琵琶湖との異なる面、共通の面をさぐることで、琵琶湖風文化の個性もみえてくるかもしれないと期待するからである。

<湖国、マラウイとマラウイ湖>

マラウイ湖はアフリカの東南部、マラウイという国にある湖である。湖の東はモザンビーク、北はタンザニアに接している。湖は南北約500キロ、最大幅は80キロほどで、面積は琵琶湖の約46倍以上ある。緯度は南緯10度から15度で、南半球にある。アフリカの東部の大地の割れ目（いわゆる大地溝帯）には、湖の歴史が数百万年というほど昔にたどることができる大きな「古代湖」が3つある。タンガニーカ湖、ビクトリア湖、マラウイ湖である。その中でもマラウイ湖は最も魚種が多く、魚の進化の宝庫としても知られている。特にマラウイは、面積からみると20%がマラウイ湖でしめられ、「湖国」とも呼ばれている。

マラウイの国民数は約1000万人で、主にトウモロコシやキャッサバという芋類を主食にしており、

おかずは野菜や魚類で、特に淡水の魚は大事なタンパク源である。淡水魚の半分以上は、マラウイ湖から供給される。この湖の周辺には漁業に依存する人たちが村をつくってすんでいる。南部の漁村のひとつ、チェンベ村での生活と風とのかかわりを紹介しよう。

チェンベ村は、1859年にリビングストーンがこのあたりに来た時にすでに存在していたといわれる村で、チェワ語という言葉話す人たちが中心となっている。村の周囲には「マラウイ湖国立公園」という湖中の魚の保護を目的とした国立公園がある。人口は5000人とも8000人ともいわれており、村長も正確な人口は知らない。

マラウイ湖辺の気候は、乾燥して雨が少ない乾期（5月～10月）と、暖かくて雨が多い雨期（11月～4月）にわかれる。トウモロコシなどの農作物が栽培されるのは雨期だ。

<風＝寒い、南風＝南、生活現象と風の名称のつながり>

さて、そのチェンベ村で話されているチェワ語では、風のことは一般には「Mphepo」という。おもしろいことに、この「Mphepo」という表現には「寒い」という意味もある。風＝寒い、ということはこの地域での、生活の中における風の意味を反映しているといえるだろう。つまりチェンベあたりで強い風がふくのは乾期の6月から8月頃の日本でいうと「冬」にあたる時期で、風がふくとたいへん「寒い」。特に密閉度の低い湖辺の家では家の

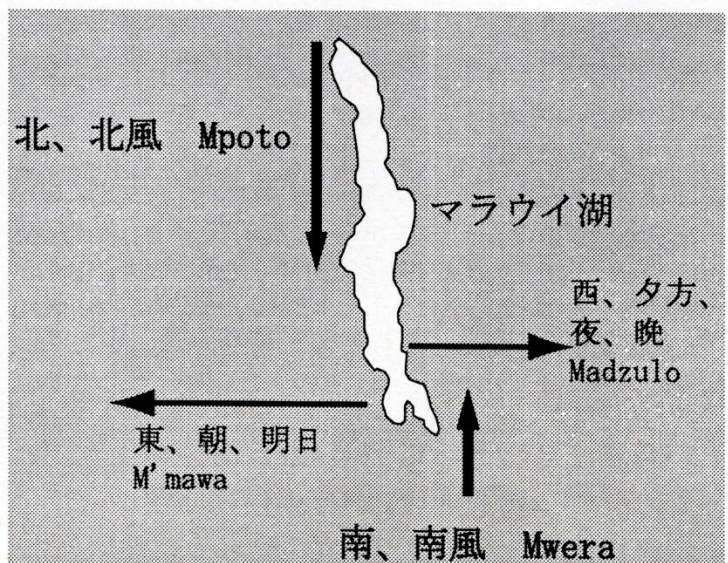


図 マラウイ湖の風の名称

中でも「寒い」、つまり「寒い」という生活感覚と「風」の存在が表裏一体の経験として、同じ言葉で表現されているということになるだろう。

特にこの時期の強い南風の季節風については「Mwera」という別名もある。マラウイ湖辺で風速を計測したことがないので、どれほどの強度の風であるかはわからないが、2000年の8月から9月にチェンベ村に滞在した時には、早朝から昼頃まで何度か「Mwera」に出会った。大きな木でも全体がゆれるほどの強さである。湖には大きな白波がたち、夜中でも目がさめるほどの轟音を伴うこともある。

「Mwera」という言葉にはもうひとつ重要な意味がある。「南」という方向を示すのである。そもそも「南」という方向表現は「北」「西」「東」という表現とセットで、地球儀上に示される地図の上での「絶対的な方向表現」である。地図上の方向表現の基準となる軸は、たとえば自分がどう移動しようと思われない。私以外の誰かが表現しても軸は変わらない。だから、それは絶対的な基準となる。私たち、たとえば、日本人は幼い頃から周囲の大人により何げなく、特に小学校にはいつてからは地図の上での「南と北」「東と西」を教えられる。そのような意味では歴史的な条件や文化など「文脈から独立した」知識となる。このような知識をもとに「近代科学」は形成された。いわば普遍知識である。

それに対して、「Mwera」という風の意味は、この地域にすむ人たちにとって、固有の、しかも季節季節にくりかえしおこる出来事を表現している。この季節風の呼び方の起源はわからないが、湖辺に人びとがすみついた頃とも想像される。特徴的な出来事に名前をつけるのは人として、ごく自然な心の働き方ともいえる。

このように考えてみると、「Mwera」が「南」と意味づけられるようになったのは、イギリス人がこのマラウイに近代科学知識をもちこんだ19世紀半ば以降と思われる。あるいは、イギリス人の前にマラウイ湖辺に外からの物質や知識（イスラム教なども含めて）をはこびこんだアラブ人であったかもしれない。しかし、残念ながら、言葉の意味起源を探るための基礎的資料が欠けている。その理由としては、マラウイ湖辺は長い間、文字をもたない「無文字社会」であったからだ。チェワ語が、アルファベット表現されるようになったのも、イギリス人がはいるころからだ。

同じように、北からふいてくる風は「Mpoto」とよばれ、「Mpoto」も「北」という方向を意味す

る。「Mpoto」という言葉が北を意味するようになったのも、「Mwera」が南を意味するようになった経緯と近いだろう。

<東、西は、生活時間現象とむすびつく>

では、東や西はどう表現されるのだろうか。この地域には、東や北からふいてくる際立った特徴的な風は認知されていない。地元で聞き取りをしても、特に東（内陸側から）や西（湖側）からの風の名称はない、という。では、東や西は、どのような生活の中での現象として意識されているのだろうか。

東は「M'mawa」と呼ばれる。しかもこの「M'mawa」は「朝」とか「明日」を意味する。つまり朝がはじまり太陽がのぼるという生活の中での時間感覚の表現が「M'mawa」といえるだろう。そのような1日の生活時間の区切りの中での太陽がのぼる方向が、後から、地図上での「東」の意味を付与されたといえるだろう。

同じように、西は「Madzulo」で、これは夕方、夜、あるいは晩を意味する。西も1日の時間の区切りの中での太陽が沈む時間という生活現象とかなっている。

つまり、「南」と「北」は、風の方向という生活に深いかかわりをもつ空間現象と結びつき、「東」と「西」は、太陽の移動という、やはり生活に密接な時間現象と結びついている。

このように、マラウイ湖辺の場合、風の方向はふたつである。ライエル・ワトソンは、世界の固有な民族の風の名称を調べる中で、風がやってくる方向は、4, 8, 12, 16, 32のいずれかであって、3, 5, 7, 11, 17ではないと発見している。人間の習性としてワトソンはそれを「人間にはものを半分に割り、さらにそれらを二分する自然の習性、つまり四の倍数を好む傾向がある」（ワトソン、1985年、『風の博物誌』河出書房新社、326頁）という。

ちなみに「Mwera」がふくと、漁師は漁業にでることをあきらめる。チェンベ付近の漁業は、夜パラフィン灯の集魚灯をたいて、表層の小さな魚をすくい取る巾着網のようなものか、刺網が多い。いずれも「Mwera」がふくと漁業は休業となる。すると稼ぎもできないし、村からタンパク源の魚もきえる。「Mwera」はある意味で、チェンベ村だけでなく、湖岸の人びとにとって、やっかいものであるが、湖の大きな自然は、神さまゆえの現象であり、人間がかえられるものではない。

琵琶湖の風伝承

—ウミンドの語る風下伝承—

青柳 智之（日本民俗学会会員）

はじめに 一風下伝承とは何か

最近、湖国を探訪し、聞き取り資料から気付いたことは、風上より風下にあたる地域の方が風による影響が大きい点である。例えば、ニシカゼが吹く場合、西側より風下に当たる東側が、本稿で挙げる事例に見られるように、風の影響を受けやすい。このように、湖における風の特性的の一つは、湖上を風が吹くことであろう。つまり、湖を挟んで、此岸・彼岸が風上・風下の関係となる。そして人々が長年、湖と密接に関わった暮らしを営むことで、伝承が生成されてくる。

風下伝承とは、ある風が吹いた場合に風下に当たる地域でその影響による民俗的な事象である。風の伝承研究は様々な視線から考察することが可能であろうが、サブタイトルにもあるように、「風下」をキーワードにした理由は、湖岸に生きる人々が長年培ってきた生活慣習をこの言葉に収束できるためである。結果として、風下地域に生きる人々の風に対する認識の一面を捉えることになるだろう。

中川金一郎さん（滋賀県西浅井郡マキノ町知内大正3年生まれ）は昭和6年、18歳の時に漁を始めた。戦地に赴くまでの2年間、西浜の「又三郎」という親方の元へ網引きに行った。「又三郎」の漁場はニシ、キタの風は漁に都合がよかったが、カミからの風（南の方角からの風）やユブキ（東の方角からの風）が吹いてきた時は出漁できなかった。海津や知内では北・西寄りの風は漁に影響はないが、ユブキやナガセといった東・南寄りの風は大概休漁したという。

本稿ではこのように風の影響を大きく受けやすい風下の地域に見られる事例を挙げ、風下に対する伝承の証言力を実証する。なお、本稿の聞き取り資料は一部を除き、1999（平成11）年9月20日～9月24日、2000（平成12）年9月14日～9月18日、2001（平成13）年1月13日～14日の調査旅行で採録したものである。いずれも調査協力者は主に漁業・船運業で湖を暮らしの糧にしてきた人々である。

1 風下伝承 一ユブキの場合

ユブキとは春から夏にかけて、南東から吹くカ

ゼの呼称である。まず、松井清治さん（滋賀県滋賀郡志賀町北小松 昭和2年生まれ）の伝承を以下に挙げる。

昭和20年代、高島郡今津町の漁港は規模が小さかった。そのため、ユブキが吹くと砂止めの石垣の上に漁仲間が立ち、帰港する漁船を迎えた。漁船が石垣に衝突しないよう、3～4メートルの竿で船体を押して港内に誘導した。木造船なので石垣に衝突すると、修繕に手間がかかった。ユブキは4月～5月頃、東から吹く風である。舟木崎より北側ではこの風を直接受ける。

ユブキについては以前にも若干の報告¹⁾をしたが、溝口昇さん（滋賀県坂田郡米原町大字朝妻昭和元年生まれ）は台風の際はユブキオロシになるが、ウミが荒れることはないと教えてくれた。「ユブキ」は「伊吹」の訛であり、伊吹山麓に当たる米原・長浜・びわ町周辺は「ユブキ」の吹き出し口としてほぼ間違いなからう。溝口さんが暮らす米原町周辺の湖岸は風上ゆえ、「ウミが荒れることはない」のである。

一方、溝口さんの伝承とは対称的な事例をもう一つ挙げてみよう。

熊谷善一郎さん（滋賀県伊香郡西浅井町塩津浜在住 大正9年生まれ）は船運業を営んでおり、主に薪を長浜や彦根、八幡などの消費地へ運搬してきた。

塩津では東の方角から吹いてくるユブキが恐れられている。台風の時には波の頭が白くなり、飛沫が家まで飛んできたという。熊谷さん宅は必ずしも湖岸にあるわけではない。湖岸から50メートルほど、その間には国道8号線が通っている。しかも湖岸といっても、塩津湾内なので風当たりは穏やかであると思われるのだが、それだけ当地はユブキの風下にあたるため、影響を強く受けたものと考えられる。

熊谷家では太平洋戦争中まで帆掛け船の大和丸を所有していた。帆船時代には彦根から塩津へ戻る際、ユブキを直接受けずに帰港する行程があった。場合によって片山の先の山まで浜伝いに進路をとった。船が風下に向かい、ユブキが追い風となるため、風の抵抗を避けるための知恵として理解することができる（図1）。

イアラシとは一般にいうヒアラシのことだという。

さて、「川掘り」の伝承は平田久夫さん（滋賀県彦根市柳川町 大正8年生まれ）も伝えている。柳川町と薩摩町の漁師は来迎川の河口に船を入れたが、強い風が吹いた後には川掘りをしてから漁に出たものだと語る。

太平洋戦争前までは滋賀県もこの川掘りの作業に来ていたという。また、特に冬場に砂が溜まると、淡海丸と呼ばれる運搬船に砂礫を積んで沖合に捨てたという。

中村治男さん（滋賀県彦根市薩摩町 昭和9年生まれ）はニシピアラシやキタカゼ—特にキタカゼが薩摩ではまともに受けるので、この時、河口に砂が溜まり、漁師が揃って、川掘りを行ったという。現在の港が整備されたのが1967（昭和42）年だから⁽¹⁾、それまで川掘りはウミンドの手によって行われてきた。

昭和20年～30年代、薩摩町・柳川町の漁協（リョウハマ漁協）にはシジミカキだけで30艘、チュウビキ船でも10艘あった。チュウビキ船には1艘あたり、3人ほど乗りあっていたと言い、砂掘りに要する人手はやはり十分だった。

ところで、正田さんは竹生島からのカゼを北西の風と伝承しており、一方、中村さんは同じく竹生島からのカゼをショウキタ（真北）と伝承しているが、両者には若干の表現の違いがみられる。薩摩町と須越町は約4キロの距離だが、なぜ、方角観が異なるのか、この違いの要因は稿を改めて述べる。

「川掘り」が琵琶湖全域で行われていた作業かどうかは今後の聞き取り調査を待たなくてはならない。しかし、少なくとも彦根周辺の湖岸は遠浅で砂礫が堆積しやすい地形であったことから、この作業が行われてきたのである。しかも、それが冬季間ということであれば、冬の季節風であるニシピアラシやキタカゼ、波浪によって風下へ砂礫が運ばれ堆積したのである。風下の伝承を研究する上で「川掘り」も重要な位置づけを持つはずである。

これまで出漁に際してはケシキミを行い、当日の風の吹き方を予測したという伝承が報告されてきた⁽²⁾。しかし、ケシキミ同様に漁師にとって「川掘り」の作業が重要であったことを理解するべきである。漁師達は「川掘り」と呼ばれる作業によって、港への船の出入りを互いに援助しあってきた。湖底や湖岸の砂が風に流され、または風に伴う波浪によって港に堆積し、漁船の出入りを妨げていたからである。

さらに漁民の要請に応じて、行政がこの作業を

行っていたことを考えても、港と砂掘りは漁民にとって大きな生活問題であったはずだ。そして川掘りは風を背景に生きてきた伝承であることを忘れてはならない。

ところで、先に入港できない船の誘導に関する伝承について松井清治さんの事例を挙げたが、松井さんはそれでも船を入港できない時、船をウマハラと呼ばれる新旭町木津の浅瀬に廻したという。筆者が1999（平成11）年9月にウマバラを訪ねると、弓状に窪んでおり、浅瀬であることはすぐに知れたし、ここが風の影響を多少なりとも受けずにすむ地であることは納得できた。しかし、浅瀬ゆえにブルドーザーが入り、埋め立て作業を行っている光景を目にした時、松井さんが語ってくれた伝承がまた一つ消えてゆくことを実感した（写真1）。

3 風と水汲み

水汲みの伝承に風が大きく関わることは先に報告をした。

湖の水を生活の糧にしてきた湖岸の人々にとって、その水が波浪で汚濁する前に汲み置きしておくことは生活に欠かすことができなかった。その際、風は水汲みの目安となった。本稿では先に報告した事例に、その後の調査で得られた事例を含めて以下に記す⁽³⁾。

- (1) 尾上では北の空が暗くなり、風が吹くと波が出るので湖の水が濁ってしまう。事前に水を汲んでおけと言われた。

（滋賀県東浅井郡湖北町海老江 今井俊美さん 大正10年生まれ）

- (2) ミナミカゼが吹くと、ウミが荒れ、雨になった。各家にはハシがあり、そこで洗物をした。ウミが荒れるとハシが流されてしまい、アラシが止んでから取りに行ったものである。汲んだ水はツボに汲み置きした。

（滋賀県高島郡高島町打下 伊原すみ子さん 昭和3年生まれ）

- (3) 特に夏場はナガセが吹くとウミが荒れ、濁るので水の確保は大変だった。よく「ミナミや、水汲んでおけ」などと当時の大人達は口にした。水はツノオケに汲んでツボに溜めた。ナガセが吹く季節になると、浜に井戸を掘り、生活用水を得た。井戸はツノオケを2個重ねた程の深



写真1 埋め立てされてゆくウマハラ

さ(約1メートル)にする。この井戸はキンジョ(5~6世帯で構成される近隣組織)の一つであった。

(滋賀県高島郡今津町南浜 田村喜代治さん 昭和8年生まれ)

- (4) 大浦の各家には釣瓶井戸やガチャンコがあった。ミナミカゼが吹いた時や冬場は井戸水を使った。逆にキタカゼが吹いた時、水はきれいになった。

(滋賀県伊香郡西浅井町大浦 柳谷清江さん 大正3年生まれ)

- (5) ナガセは1週間吹いていると、藻などが付着するので洗い物すらできなかった。米研ぎはハマサキで行ったが、「琵琶湖の水で米を研ぐと、米がいたまん」と言ったという。熊谷家では飲用水は隣家の井戸を借用したが、桶だと腐りやすいのでカメに貯蔵した。

(滋賀県伊香郡西浅井町塩津浜 熊谷善一郎さん 大正9年生まれ)

- (6) 西居家では水を保存しておくツボがあった。ミナミアラシの台風の際は湖の水が濁った。水汲みは家庭の主婦の仕事だった。

(滋賀県近江八幡市沖島町 西居政太郎さん 明治43年生まれ)

- (5) に見られる「ナガセ」は7月頃から吹く南東

の風である。「ナガセヌカ」とはナガセが1週間吹き止まないことをいう、漁に出られないこともある(滋賀県高島郡今津町西浜 橋本一雄さん 昭和3年生まれ)。湖の北西部、西浜地区・北部、塩津浜地区はナガセの風下に当たる。

(6) は沖島町の伝承であるが、ミナミアラシは長命寺から吹いてくる風と、西居さんは語ってくれた。長命寺と沖島町は地形図上の直線距離で約5キロと近距離であっても、台風のような強風になると水は濁る。湖水の汚濁が風によるところが大きいことを物語っている。

4 漁獲と風下伝承

琵琶湖では様々な漁法で漁が行われてきた。本稿では風下と関わる若干の事例を挙げて、漁獲と風下の関わりについて触れたい。

橋本一雄さん(滋賀県高島郡今津町西浜 昭和3年生まれ)は冬季間、カイビキ(シジミ漁)を行っていたが、東から波がある時は漁に出られないと言う

一方、石塚勇さん(滋賀県野洲郡中主町菖蒲 大正15年生まれ)は12月~5月の間、沖島~菖蒲でカイビキをしていた。キタ・ニシカゼの時は出漁できなかったという。

田中善雄さん(滋賀県野洲郡中主町菖蒲 昭和6年生まれ)もカイビキを行っていた一人である。現在は9月~翌4月の間、菖蒲~沖島付近で操業する。南西の風(カゼウラ)の時は出漁できるが、冬場は西、北西の風が多いと語ってくれた。

正田新作さん(滋賀県彦根市須越町 大正9年生まれ)は12月~4月の間、カイビキをしていた。砂

地のナギサバタ、須越岸100メートル～150メートルが新作さんの漁場だった。これ以上深い場所はダブガイしかなく、カイビキには不適だった。

カイビキの際、須越ではヒアラシの波は風ほどきつくないので漁に出ることができた。しかし尾上や長浜になると、波も高くなる。

また、橋本さんは地引き網漁についても次のように教えてくれた。地引網漁の場合、風下に当たる地域では漁ができず、湖西地方では東から風が吹いた時は漁ができなかった。西から吹いてくる場合は漁ができ、漁期は12月20日～7月の間だったが、とりわけ、ニシビアラシの時は豊漁だった。和邇・小松・今津・知内・海津では昭和35年～昭和50年の間、コアユの地引網漁を行っていた。今津では35人ほどが地引網漁を操業していた。

松田佐一さん（伊香郡西浅井町月出 大正3年生まれ）は71歳になるまでの20年間、琵琶湖の漁業に携わってきたが、漁を始めた時分、3～5月の間、オイサデ漁をした。オイサデ漁はミナミカゼの時はできないこともあったという。水際が汚濁したからだ。

中村治男さん（彦根市薩摩町 昭和9年生まれ）は20年前からエリ漁をウラから1000メートルの湖上に作った。2000（平成12）年11月21日から12月3日の間、コアユ漁が解禁された。しかし中村さんが実際に漁に出られたのは5～6日だった。これは先にも触れたキタカゼの風下に当たっており、風の抵抗を強く受けるためである。

そもそも、中村さんがエリ漁を始められたのはエリの素材がそれまでの竹からグラスファイバー製に変わったからである。大釜俊弥さん（滋賀県高島郡今津町浜分 昭和8年生まれ）はエリ漁専門の漁師だが、能登川・彦根・長浜はニシカゼが強かったので簀エリは立てられず、網エリになって

からエリ漁を始めたという。昭和50年過ぎのことだという。

このように漁獲においても、風下における風・波浪の影響が大きいことが理解できる。

5 終わりに

本稿では「風下」をキーワードに風の伝承を概観してきた。風下にあたる地域には固有の風伝承が生きてきたことを確認できた。漁業や船運業に携わる人々だけでなく、水汲みの事例から分かるように、家庭の主婦も風と深い関わりを持ってきたのである。

本稿で取り上げた伝承は「風下」の一部であることはいうまでもない。さらに琵琶湖全体にわたって、体系的にまとめていくべきだろう。これによって、湖国の風伝承に新たな分析ができるだろう。読者諸氏の忌憚なき御意見を願うばかりである。

【参考文献】

- (1) 青柳智之, 1999, 「琵琶湖の風の民俗 2 琵琶湖の季節風」琵琶湖地域環境教育研究会編, 『琵琶湖博物館研究調査報告』第14号, 244頁～245頁
- (2) 滋賀県土木部河港課, 1994, 『滋賀の漁港』
- (3) 橋本鉄男, 1999, 「ワタリスジ談義—琵琶湖周辺気候と民俗—」琵琶湖地域環境教育研究会編, 『琵琶湖博物館研究調査報告』第14号.
- (4) 前掲(1)に同じ, 「第5節 風と水汲み」253頁～255頁

◆次号予告 本冊子は季刊発行の予定です。次号は春（4月頃）発行予定です。

ビワコダスから見た近江盆地の局地風（仮題）
ビワコダスの情報収集・展示システム（仮題）
漁師が語る琵琶湖の風伝承（仮題）

武田栄夫・松井一幸
戸田孝
青柳智之

◆皆様の地域にはどんな風があり、またどのように名づけられていますか？風の名前（地域固有の表現）を教えてください。

◆編集・発行・および連絡先

琵琶湖地域環境教育研究会（ビワコダス）冊子編集委員会
〒520-0862 大津市平津2-5-1 滋賀大学教育学部 板倉研究室内 琵琶湖地域環境教育研究会事務局
URL <http://koayu.eri.co.jp/biwadas> mail biwamaga@eri.co.jp
なお、本冊子はメールマガジンでも配布しております。
お申し込みは biwamaga@eri.co.jp までメールください。



無断転載を禁じます